



大阪市立大学
工学部同窓会

大阪市立大学工学部同窓会 第2号

同窓会だより

1981年11月30日
大阪市立大学工学部同窓会
〒558 大阪市住吉区杉本3丁目
3-138 TEL06(692)1231(代)
発行人 井田憲治



ごあいさつ

同窓会々長 井田 憲治

大阪市立大学工学部同窓会報第2号の発刊にあたり、一言ごあいさつ申し上げます。

昨年まで約10年間の長期にわたり、本同窓会の基礎固めと発展にご尽力をいただきました並河前会長の後を受けまして、私は本年2月からはからずも第5期の同窓会長を引継ぎました。何分力量不足のため皆様のご期待にそえない面も多々あろうかと存じますが、誠心誠意務めたいと心懸けております。

激動の80年代も早や2年が経過しようとしています。国内的にはエネルギー・食糧、国際的には核による緊張等々、幾多の困難な課題が山積し、今後予断の許さない状況が逼迫してくると思いますが、同窓会員諸氏には夫々の分野で研究活動・生産活動に多大の努力を払はれていることを聞き及ぶとき、誠に心強さを感じます。

こうした情勢のもとでは同窓会としても、会員相互の有用な情報伝達・交換の場として発展していくことが、この困難な時代をのりきるための一方策であろうと考えられます。しかしながら国や地方の機関に情報公開が義務づけられ、市民にこれらが解放されつつあるとは申せ、これを活用する側に戸惑いが生じているのを見るにつけ、上述の場の育成には困難さと複雑さが感ぜられます。異なる学科間にあっても工学系統の特別な緊密性は衆人の認めるところであり、この会報や同窓会名簿によって、人を知り物を識ることができますならば同窓会としては望外の喜びであり、ひいては情報連絡の場としての基ができてくるものと信じます。

第2臨調を受けての行政改革が、昨今政府や報道関係から種々流布されておりますが、各大学はもちろん、大阪市立大学としてもこれを避けて通れるものではないでしょう。教育・研究に卓抜した教官を有し、有能な学生を多数擁したとしても、大学としては工学部の更に大きな発展のための設備充実や構想の実現について、同窓会に多くを期待してこられるものと考えられます。よって同窓会としては、会員諸氏におかれてこうした風潮を踏まえ今後の会のあり方を活発に論議していただき、これからの指向を定義づけられんことを希望します。

おわりに会員諸氏のご発展とご健康であらせられること衷心より祈念いたします。

(土木・昭和30年卒、神戸市土木局垂水土木事務所々長)

(田中記念館)



同窓の皆様へ

名誉会長 三瀬 貞



昭和56年も残り少なくなって、やがて新しい年(大学創立102年)を迎えようとしています。

工学部としても、昭和58年で都島工業専門学校の創設以来40周年を迎えることになります。その間、終戦、学制改革による新制大学へ

の移行、理工分離、大学紛争、オイルショック等、色々な事がありました。同窓の皆様方にも、その時々の学園での生活に事寄せて忘れ難い思い出も多いことと存じます。皆様方の御力添えで何か40周年を記念する事業をささやかにでも行なえたらと願っています。

昨年11月、多年工学部のために御尽力いただいた古市亮蔵名誉教授に勲三等旭日中綬章の叙勲がありました。今年の3月には、工専・大学と長い間、教育・研究に御尽力いただいた上田光雄先生が停年で御退職され、名誉教授となられました。また4月には、新しく成瀬哲生教授(建築)が近畿大学理工学部より御着任になりました。9月には、元工学部長、永井莊七郎名誉教授が亡くなられ、従四位勲三等旭日中綬章が追贈されました。ここに慎んで追悼の意を表すとともに御冥福を御祈り申し上げます。この11月には、現在も本学部のために色々とお支援助をいただいている三戸左内名誉教授に勲三等瑞宝章の叙勲がありました。

このように時は確実に流れ、世情も揺れ動いています。工学の教育と研究とは、或る意味では時代の流れに敏感でなければならない一面を持っています。現在のように、学問・技術が細分化され、多様化されて参りますとこれに応じて学際領域に対応し、また卒業生や多くの市民の生涯教育の支えにもなる等という要求にも工学部としては応えなければならないでしょう。唯々行政改革の声の高い社会状況の中ではその実現はなかなか困難ではありますが、他部局に迷惑を掛けずに、市大総体としてもよくなるように一歩でも二歩でも前進したいと願っています。

研究・教育における環境作りも、経済の安定成長期に入って年毎に困難になってきています。何とかこの苦境を切抜けて行くためには、学内外で多くの方達の御力にすがらる場合も多いことと存じます。よろしく御願ひ申し上げます。

今後とも厳しい状況が続くものと思われませんが、同窓の先輩・諸兄姉の御活躍と御多幸を心からお祈り申し上げます。

(工学部長、土木工学科教授)

ご挨拶に代えて

副会長 高田 満



マスクの予想が次から次へと覆った昨年に引続いた激動・意外性の連続した昨今、会員の皆様如何お過しですか。世の景気は上向きの傾向になったとは云うものの、予断を許さないのが実情ではないでしょうか。

最近新聞を賑わした、コンピュータ化された業務に対する知能犯の増加。推理小説を読む様ですね。私もコンピューター、特にポケットコンピューターを技術計算に愛用している一人です。若い者の一部には、便利さに眩惑され、結果のみを鵜呑みにし、依って来る所以…physical meaning …を知らないと言いか、重視しない為の失敗を起しております。

さて、母校・恩師・同窓のこと、何等顧みることなく30有余年、第1号会報を読み、又はからずも役員の一員として、55年度卒業生の祝賀会に列席し、小生懐しさと共に、今迄の無関心さに気付いた次第。誠に申し訳けない。思えば都島における住いでの授業、老配属将校(大佐?)とシナ軍からの鹵獲銃(三八歩兵銃より重かった)をかついでの教練、昭和20年勤労動員による東芝・余部工場での生活、特に特攻有志の戦果による南瓜で飢を凌ぎ、果ては先方舎監と対立して吾々3日間の一斉休暇をとり、相手を困惑させると共に、丁度8月15日の終戦で事なきを得たこと、正倉院の初公開に、代返を頼んで奈良に行ったこと、つつまじやかな卒業式と就職難に対する平井平八郎先生はじめ諸先生方のご努力等々、今さらの様に脳裡に浮んで参りました。

母校に「別れ」を告げ、人によっては勤めに出で、何年か後「別れ」を告げる。……人は本来寂しいものです。人生を振り返ってみると、さよならばかりを言って生きてきた様な気がします。「別れに当たってその言や良し」という諺の通り、寂しさは、ことばに人生を感じさせるうまいおいを与えます。……と何かの本で読みました。

日常生活では何等顧みることのない母校、しかし乍ら他方、善きにつけ悪きにつけて思い出され、利用されるのが母校であり、恩師・同窓のつながりではないでしょうか。この為にも会報・名簿の活用と、同窓会を通じての工学部の盛り上げをはかるうではありませんか。且つ又、意識昂揚の為にも率先して役員を引受けると共に、各種会合、行事への積極参加に努め様ではありませんか。

(電気、昭和22年卒 住友電気工業(株)技師長)

上海市との学術交流

東野 一郎



大阪市が中国の上海市と姉妹都市関係を結んだのは、昭和49年で、5年たった昭和54年になって、学術交流の話が持上った。

当時の森川晃卿学長（現在は相愛女子短大学長）は、この事について非常な熱意を示され、市大だけ

では不十分ということで、在阪の国公立大学に呼びかけられ、「大阪・上海学術交流協議会」を設立され、第一回の学術交流計画を提唱された。これに呼応して、学内では、「大阪・上海学術交流委員会」が設置された。

その工学部の委員として選出されたことが、私にとって以後、中国屋になって仕舞うのである。市大からも何人かを派遣しなければということで工学部の教授会でも照会したが申出がなく、結局、私が行かなければならない破目となり、昭和54年4月29日から5月13日までの15日間、「訪中学術交流団」18名の一員となり、上海、南京、西安および北京の四都市で学術講演をしながら巡回旅行をし、その一応の目的を果たした。帰国後、少し間を置いて同数の上海の各大学関係の人々を迎え、第一回の学術交流は無事に完了した。まあこれは、いわば開通式みたいなもので、本番はこれから続くわけである。昭和55年度は大阪側よりの専門家の派遣として電気工学科の山下一美教授が2週間、上海科学技術大学で講義のため訪中され、昭和56年度になって、建築学科の齊藤和夫助教授が10月2週間講義のため訪中された。また年度末には電気工学科の安藤慶一教授が矢張講義のため上海に行かれることになっている。第一回の訪中団の秘書長をされた、原研の箕浦教授が帰国後、病気のため急逝されたため、前記の委員会の副委員長の役が私に廻って来て以来、これに関する仕事が急に忙しくなる。昭和55年度の上海側の進修生（留学生のこと）の受入れに際し、私はその一人の上海工業大学の葉祐中先生の身元引受人となり6ヶ月間機械工学科の諸先生のご協力で無事任務を果たしたと思ったら、今度は私に4週間、上海に来て講義をして欲しいという手紙が舞い込んで来た。4週間は少ししんどいので3週間で我慢して欲しいと返事を出したところ、今度は上海側の専門家が4名、この月末に来日するというので、目下、滞日中のスケジュールをあちらこちらの大学や企業の方をお願いしながら作成中の今日此頃である。

いよいよ中国語を勉強しなくてはならないのも、そう遠い将来でもないようである。（機械工学科教授）

思い出すまに

竹屋 芳夫



私が本大学に赴任してから、この10月で丁度25年になる。

昭和57年3月で私も北浜教授とともに定年退官することになっている。四半世紀という長い歳月をふりかえってみると、楽しかったこと、苦しかったこと、馬鹿々々し

かったこと等、様々の思い出が去来するのである。今度、同窓会より会報に何か書くようにとの依頼があり、色々迷った末、やはり楽しい思い出をしるしてみようと思う。

昭和33年のことである。当時、授業で時間があまるとよく雑談をしていたが、ある日、三回生の授業の後で、「常々思っているのだが、電気の学生と先生との親睦のための会がほしい。また先輩とのつながりを保つために、卒業生の名簿をつくりたい云々」と話したことがあった。前任の大学にそのような会があり、色々活躍していたので、本大学に来て、つくづくその必要を痛感していたからであった。その場はそれですんだのであったが、翌34年、私にとってははじめての教室主任の年であったが、学年のはじめ、前記のクラスの講義の時、「先生あの話はどうなっているのですか。ぜひやりたいですね」との声があがった。その後、忙しさに取りまぎれて、すっかり忘れていたので、大変うれしく、早速先生方と相談して、実行にうつすことにした。今でも楽しい思い出の一つであるが、まもなく、学生達と第一回目の運動会を、あきたなくもなつかしい扇町の北学舎のグラウンドで開くことが出来た。世話役の諸君は競技の種目や景品等に頭をひねり、有意義な一日を過ごした。次に名簿であるが、これにはかなり時間がかかった。各先生のもとに来て年賀状をもとにして、子引き孫引きと進めてゆき、初回としては、かなり整備したものを皆に配布することが出来た。広告をもらうため、協賛の会社を求めて走りまわったこともあった。当時の関係者の努力に感謝したい。その後、この会は、運動会をはじめ、ハイキング、夕食会などの行事が44年頃までつづいていたが、大学紛争のため中絶してしまった。最近復活のきざしが見えていることを期待したい。名簿の方も、二回目まで発行した所で、新しく工学部の同窓会が出来たので、それに後事を託す形で、三回目は中止したように思う。二回目の名簿は殆んど完備していたと思うが、とにかく社会に出ると、同窓の縦横のつながりは極めて重要なものである。それには先づ、毎年正確で完備した名簿が発行されつづけることが必要であり、関係の諸君の熱意と努力に期待すること大である。さらに同じ意味で全学連合同窓会の発展を祈っている。（電気工学科教授）

11年ぶりの市大

太垣和一郎



昨年の55年春、11年ぶりに市大へ帰ってきました。44年の春、桐生の群馬大学工学部応用化学科へ移った時はまさか再び舞いもどってくるとは夢にも思いませんでした。普通ではありえないいろいろな偶然や事件が重なったせいでしょう。

市大は私にとって先生商売の最初の出発点でした。下手な講義をシドロモドロに始めた当時を思うと今でも恥ずかしさで体が熱くなります。でも離れて桐生の地で暮してみると、あの扇町のボロ校舎に溢れていた湧き立つような活気と、自由な雰囲気がとてもなつかしく思われました。と同時に、その後の激しい紛争を身を切られるような辛い思いで見守ってきました。その市大へ帰る。なつかしさとともに不安も大変でした。今工学部の建物は外から見る限り少し古び、緑が一層深くなっただけで12年前と少しも変わっていません。中へは入って住み直してみてもやはりなつかしい古巣です。人の温かさもしみじみ感じています。しかし何が変り何が変ってないのか私にはまだよく分かりませんが、紛争前とはたしかに同じではありません。いろいろタブーもあるようです。

人は場所を変え、立場を変えてみて初めて気がつくことが多いものです。群大工学部の応用化学科には60年以上の伝統があります。それだけに地方国立大学ですが化学系に関する限り図書や実験設備はこの応用化学科よりも充実しています。学科運営もかなりきちんと制度化されていてこのようにルーズではありません。カリキュラムも5年毎に委員会をつくって検討・改正しています。また化学系は3学科、14講座編成の大世帯ですから、教官の出身も多彩でいろいろ教えられることが多かったと思っています。もちろん博士課程はありませんし、いろんな矛盾や欠点にも悩んでいます。ただ当り前のことですがそれらの悩みを解決しようとする教官の間の協力の姿勢が印象的でした。

伝統とは時間でもあります。良いものも悪いものも一朝にしては出来ません。一度打倒すると回復の容易でないものもあります。良いものほどそうでしょう。私も再び市大の一員となって、良き伝統を育てるために努力したいと思っています。大阪市の再生とも深く関わっているかも知れません。卒業生の皆様の応援を切にお願いしたいと思います。教官はもちろんですが在学生諸君の奮起もお願いしたいものです。(応用化学科主任教授)

建築学科だより

日置興一郎



学科の全般的な様子は、同窓会だより第1号での、川村教授執筆の学科の近況にありますので、この1年での2件の人事異動をお知らせします。

まず、都島工専、市大の建築学科の歴史と共に歩んで来られました。上田光雄先生が、昭和56年3月末をもって定年退職され、名誉教授になられたことでもあります。建築学科の今の同窓のすべての方々、先生の講義を聴かれたはずで、実に37年の長きにわたり、建築学および図学を教えて来られたわけでもあります。先生の長年の御苦労に心から感謝し、益々の御健勝と御活躍を祈りたいと思います。先生のお元気な御様子は、写真を御覧ください。上田先生の後は、三輪雅久教授が図学の兼担を勤めておられます。



また、田中良太郎先生の後を担当されました、石堂正三郎教授が定年御退職の後、空いておりました建築環境工学講座の教授に、成瀬哲生先生が昭和56年4月1日付で着任されました。先生の御専門は、熱環境学であります。

秋風と共に、来春卒業希望の学生は、就職試験の時期を迎え、先輩方のお世話になることも多いかと思えます。先輩方の御活躍と、伝統の重みを、ひしひしと感じないではおれないのではないのでしょうか。

同窓生の皆様の御活躍と、後に続く若者達の立派な発展を願って、報告に代えます。(建築学教室主任教授)

現代英国事情

村井 昭



1978年11月～'79年3月と'80年8月
英国国立物理学研究所に留学した。

英国に着いた直後に、国内身分
証明書の作成に行ったロンドン警
視庁で、美人の婦警さんが最後に
云った言葉が、私には「パイのパ
イのパイ」と聞えた。何故此処で

日本の歌が出てくるのかと不審に思って聞き直すと、何と“pay eight pounds”であった。それはべらんめえ口調の所謂cock・ney 英語であって、大ロンドン周辺の人に多く、ok, today, takeなどの発音も、オーキ、トダーイ、タイクと聞えた。しかし、馴れてくると、相手の気持を察して話してくれる親切心を感じた。

家庭の照明は電球で、蛍光灯類は殆んどなく、衣・食の質素さや住宅の古さが目についた。デパートでは「女王のスタンドと同じもの」と註がついた20万円位の品に感嘆する市民もいた。電気店やカメラ店には日本製品が溢れ、「パテント期限も切れ、日本が造るのに文句は無い。科学的基礎から応用まで全部こちらで開発したんだが、我々は大量生産の手段で日本に敗れた」と残念がっていた。また、「此の200年来、英国は約10回の大きな戦争全部に勝ったが、生活水準は下がる一方だ」と、ポンドの価値の下落を嘆いてもいた。

唯一の希望であった北海の油もコスト高のために全部輸出して国内ではイラン等の安い油を使ったり、著作権法で禁止している図書・ラジオ・TV等のコピーも、個人の趣味的な生テープを課税して認める準備をしているようであった。

そして、「インフレ・失業・IRA問題等を抱えながら、就学率は80%で、高等教育機関への進学率も米国の2倍あり、社会的な基礎はまだ健全である」という意味から、“It is still great Britain”と云っていた。また冬期3ヶ月は2000米位上空にたち込む厚い雲のために、青空の日は数日しかないが、“Every cloud has a silver Lining”(あの雲の裏側は銀色に輝いている)という諺を引用し、やがて陽の目を見ると頑張っていた。

しかし、私には社会的な活力の落ちた先老国という印象が強く、現在日本が突入しつつある高令化社会のX年後の姿ではないかと思えた。(応用物理学科助教授)

私の歩んで来た道

高野 孝



昭和18年3月東京自由ヶ丘学園
中学校を卒業、同年4月都島工專
に入学、入学した時から東京弁と
関西弁の違いに悩まされ軍事教官
から言葉が生意気だと殴られそれ
だけで随分損をしたものだ。一年
生の時はどうやら講義は受けられ

たが二年になると最早勉強どころか米軍の艦載機が飛来し砲撃を受けるなど又軍事教練の時間が増え学生らしき生治とは遠きものとなり二学期ぐらいから陸軍需品廠に動員され学生であり乍ら学生ではなかった昭和20年9月、6ヶ月繰り上げ卒業を迎へ理工科なるが故の入営延期も終り、いよいよ入営の日が近づいたと思っていたら卒業前8月15日終戦となった。これから焼土と化した本土の中で食料難と栄養失調と戦う事になる。卒業はしたものの猛烈な就職難である当然の事だ、それでも運良く6ヶ月失業後21年3月(株)松村組に入社する事が出来た。大阪本店設計課へ配属されたが間もなく東京支店へ転勤になり進駐軍の工事を担当。会社の寮生活が始った。この時の食事は朝重湯一杯、昼ふかしパン2ヶ、夜薩摩語2本という毎日が続き到頭栄養失調となり5百米も歩けぬ様になってしまった。その時の体重は39kg。国へ帰るのも何か負け犬の様でみじめだし悶々として居る内に1人皆んなと同じものを食べているのに痩せていないのが居り聞いてみると宗教をやっているとの事。人間困った時は薬をも掴む思いで毎日その人の講義を聞き、また本も読んだ。「生長の家」である。精神が肉体に及ぼす力の如何に偉大なものか篤と知らされ全てに感謝の気持ちを持ってば肉体は健全であると言うのだ。到頭道場へ行く事になり僅か10日間で全く別人間となり変わり精気が戻ってきた。全く不思議と云う他ない。この時の教えに「人間本来病気はない。病気は心の影」と若い私には純粹に信じられたから救われたと思う。24年大阪へ転勤、積算課勤務となる。朝鮮戦争が勃発し九州の米軍飛行場の格納庫工事を担当。3ヶ月の突貫工事後又、大阪へ転勤。池田市民病院の現場担当となる。我々の現場時代は土方に等しくコンクリート打からセメント担ぎ、建材の運搬やら監督兼、土方である。体力の弱い私には可成無理であった。既に26才となって技術屋らしい仕事もせずにこのままで良いのかと悩む様になりたまたま(株)あめりか屋で人が欲しいと云う話があり会社の諒解を得て会社を変わる事にした。26年の夏の事である。まだまだ不況のどん底時代であった28年、富士山麓で初めて責任者として製紙工場を手掛け、翌年今のニュージャパン(サウナ)の一

期工事を担当、次いで紀伊勝浦でホテルを二軒。それが終ると千葉県で大学校舎の新築etc。昭和34年やと大阪に帰る事が出来た。結婚は恋愛などする間もない事から32年見合結婚をしたが、殆んど地方暮らしで落ち着く事なく35年に入る。この9年間可成の規模の工事を任せて載いた御陰で技術屋として又営業方面でも少し自信がついた事は勤務させて載いた社長始め先輩方々には心から感謝しておる次第です。又基本を教えて載き根性を叩き込んで載いた松村様にも今振り返って本当に良い所へ就職したものだ感謝の気持ちで一杯であります。

昭和35年5月満34才、長年御世話になった(株)あめりか屋を円満退職し自営の道に入る。最初は住宅など手掛け1人だから設計積算現場監督経理と全く寝る暇もない日が続いた。然し幸せにも次から次と知人が仕事を紹介してくれて仕事がなく困った事はなかった。社員の数も増え始め昭和47年には50人程になり余り苦勞せずに来たが48年のオイルショックより世の中が一変し経営はやりにくくなり本腰を入れて経営に取り組む事となる。現在社員40人年商30億。完工高22億程度。特別良くもなく悪くもないしと云った状態である。この一筆建築屋として卒業以来36年間の歩んで来た道を短縮して書いたものですが後輩の一助ともなれば幸いと存じ上げ筆をおきます。
(建築、昭和20年卒、高野建築株式会社代表取締役)

思ひつくま

葉田喜一郎



都島工専を卒業して早や31年、私は戦后2年目の昭和22年、当時の大高入学に失敗し都島工専に入学したものの、御承知の通り当時は桃丘国民学校(天王寺区北山町)にあり、この様な工専らしからぬ所で勉強なんていやだ、もう一年浪人してと一時は行くのをためらったのですが、友人の説得で決心をつけて入学した様なことです。何の設備もない、名ばかりの学校で先生方も大変だったと思ひます。

現在は、学校の環境もよく、又物質的にも恵まれ、学生は自動車で通学する様な時代で、仕事等も機械化が進み、当時とくらべると時間的にも余裕が出来る様ですが、それでかへって余暇の時間を過す方法を反省させられる様に思ひます。

さて次に同窓といふ字の意味を考へて見ました。入学するまでは全くの他人が、何年かの学生生活を共にし卒業すると同窓生といふ事で特別な親近感をもつ様になります。そして仕事の面や色々な会合、等で同窓の特権をフルに発揮し、利益に、楽しみに、また幸せにと繋がりて行きます。私達は小さな校舎が幸して機械だけでなく、



電気、建築、土木の色々な方々と知り合え、マンションを建てるに際して、建築、水道、電気、消防の面で同窓の連帯感をしみじみ痛感している様な現在です。

さて我々機械五期の同期会の事になりますが、昭和45年頃に始めて現在まで、林君(消防局)、荘司君(日新製鋼)、瀬戸君(鉄工所)、等と協力して楽しい会合をもち続けています。昨年は13名が集まり(同期生28名)楽しい放談に熱が入り、予定の時間をオーバーし「続きは又」と、別れの握手にも自然に力が入り再会を約して別れました。とくに、思わぬ人が遠方より出席してくれた時には幹事として感激を受けます。

ただ南条先生を始め同級の中村、北野、石田君、等が他界され、又中学、大学の同窓、先輩、後輩の誰々もとの話を聞くとさみしい感じで、お互に健康でいつまでも逢へる様に思わずにはおられません。

次は市大工学部の校舎も知らないものの為に、学舎の見学をかねた機械科の会合を一度考えて頂ければ幸いです。

昨年は市立大学百年祭も行われ、ますます同窓との繋がりが強くなり、年老いた先輩、若い後輩が共に語り合え気炎をあげることができて大きな意義があったことと思います。(機械、昭和25年卒、鑄造鉄工所経営)

学校教育における役割

中島弘

ユネスコでの重職、国立教育研究所の所長をしておられた教育界の大先輩、故平塚益徳先生は、学校教育は次の役割があつてこそ効果が充分あがると述べておられる。

1. 家庭と同様、和やかさ、静けさ、落ち着きが絶対条件である。
2. 学校は専門家が教える場所である。先生は専門家である。専門家の条件には①専門家になる前に十分



勉強すること。②常に勉強すること。③私利私欲でなく公けに勉することである。専門家としての先生の特別条件は、①教える相手を知ること、②教える内容を知ること。③教え方である。なお、人間の本来のあり方について絶えず反省し、吟味し、追求する求道が大切である。

3. 嫌いなものが好きになる場所である。

使命感を持って教育にあたる先生が喜んで教えれば不得手なものを持つ生徒でも一生懸命やるという気持ちが内から出、これが刺戟・勇気づけられるものである。

4. 身につくこと。

①学校で習った知識、②技術、③社会性、④情操(知的、美的、道徳的、宗教的)が身につくこと。

5. いい友達に会える。

学校の友達は一生涯の友達である。

6. いい先生のいない所は学校でない。

先生の立場では、運命的に一人一人の生徒に出会う場所である。運命で出会った一人一人の言わば生徒、この伸びる力に対して何らかの形でもって、援助し、方向づけをし、刺戟を与え、勇気づけをする。先生あるいは生徒として会う時期は限られているが一定の時期に会って、刺戟、影響、方向づけを受けることによって生徒は伸びている。その伸びて行く姿をこの上なく喜ぶことのできる人、これが学校の先生である。

平塚先生は、卒業生に「諸君は、かつて教場で私と会った。はっきりいえば私の弟子だということで、私が喜びを持てるような一人一人になってもらいたい。」と。

私の小学校以来の各先生は何れも上記の諸条件に合致した先生が多く、そのご恩に報ずるため現在迄同窓会の世話をさせていただいている。市大の同窓会は原則として年1回行っており、56年は恩師の近くの料亭で行ない二次会で自宅を訪問させていただいた。

(電気、昭和25年卒 公認会計士)



雑感

小林 誠哉



戦に敗れて復員する道すがら見る各都市は、空襲で一面の焼野原でした。大阪とてその例外であり得る筈もなく、真に惨な街となり果てて居りました。その後の5年詳りは口にする物すら乏しい時代が続きましたので、働きながら

学生生活を送らねばならぬ義となり、苦難の日々でありました。それから30年余が過ぎ、その間に感じ取った事が少しでも若い人の参考になればとペンを持った次第です。

我々戦時中に、旧制中学校等で学んだ者は一般的には命令があれば、仮令それが少々無理であっても従うものだと云う教育を受けました。そしてそれが一旦身につくと仲々抜け切れるものではありません。ところが終戦を境に民主主義の国家にするのだと云う所から、人は皆平等であり(尤も各人の異った役割は尊重される可きであると云う理解の元に)話し合いに基本を置くのだと云う風に指導されて居ります。この様に基本的な価値観が年代によって異ってゐるんだと云うことを、年輩者若者の双方がよく理解し合っていないと職場の人間関係がギスギスしたものになる恐れがあります。

勤務先が公的住宅の供給を一貫してやって居りますので、業務都合によるものでしょうか、入社後永らく籍を置いた建設課から、用地買収宅地開発、事業計画、と廻って現在は住宅や公益的施設に分譲、並びに賃貸住宅の管理業務に従事し、技術者に色々注文をつける立場になって居ります。確かに自分達のやってみたら頃より工法が多様化し、設計・積算・工事監理等がより科学的になり専門化が進んで来ているのが感じ取れます。然し専門化する余りその部分は良く判っているが、全体の内の一部分であるとしての捕え方がどうしても不十分になり、ひいては事業の流れの中での技術者としての役割になかなか目が届かない様子が時々見受けられます。大変難しい事ではありましようが、これからは今迄以上に技術者がその技術を最高度に発揮する為には世の中を広く見渡せるバランスの取れた力を備えるのが大切なことではありませんまいか。

科学の発達によって世界は益々狭くなり、外国の影響を直接に受ける激動の時代に突入し建築業界とて他の産業と同様に、生産性の向上が最大の命題でありましよう。従って今迄と同じようにやっていたら良いのだと云うのでなく、大いに創意工夫をこらして建築界に新風を送り込んで頂きたいと望んで居ります。

(建築、昭和25年卒、大阪府住宅供給公社業務部長)

港とともに

向井忠治郎



歳月の流れ去るのは速いもので、卒業以来31年の月日が経過したが、ふりかえって見ると学生時代がついこの間のようにも思える。

卒業と同事に大阪市港湾局に奉職し、殆ど一貫して港湾技術者としての道を歩み、大阪港の復興と発展に参与し、各種の技術経験を積んだが、私にとって忘れることのできない仕事は、水深D.L. -10m、延長275mの鉄筋コンクリート製横橋である桜島第一号繫船岸の大阪市直営による築造工事（昭和27年～29年）並びに、ニューマポンプによる我国最初の汚泥浚渫工法の開発実験とニューマポンプ式浚渫船「新海」の建造と同船団の編成（昭和46年～49年）であろうか。

前者は、軟弱地盤の不等沈下及び各種災害に耐えることのできる強固な構造とされ、部材及び橋脚をあらかじめプレキャストし、現場で橋脚、主桁の組合せ作業を行った。とくに水平力に抵抗させるため基礎斜杭を打ち、基礎底版と杭、基礎底版と橋脚の間隙にセメントと粗骨材のみの特殊コンクリートを水中施工し、ドライワークにより橋脚内基礎杭の中詰コンクリート巻立てに成功した。当時としては画期的な新方式による工事であり、大阪市所有の作業船を縦横に駆使して施工にあたったもので、外航貨物船の第一船が着岸した時の感動は現在も鮮やかに残っている。

後者については、ニューマポンプが在来の浚渫機構と発想を全く異にした空気圧送式のポンプであり、高い含泥率で、2次汚染発生のおそれもなく浚渫できることに着目し、イタリヤより同ポンプを導入し、浚渫実験を行い、汚泥浚渫に対する適性を実証し、この実証をもとにして、ニューマポンプ式浚渫船「新海」を建造した。この仕事により後日大阪市長より業務改善提案の優秀賞を受賞することが出来た。

昭和54年に技術士本試験にチャレンジし、合格することができたのも、大阪港での貴重な経験の積重ねの結果であると感謝している。

近い将来に技術士法が改正され、大学卒業と同時に技術士補受験の資格が与えられるような情勢にあるようであるが、新進の技術者の諸兄は自分の仕事を論文にまとめる努力をするとともに、新技術の開発に意欲を燃やされるようおすゝめするものである。

（土木、昭和25年卒、大阪南港環境整備公社・工務課長）

私の運命

杉浦 重光



私達は昭和30年の卒業で満26年を経過、間もなく50才の大白に達しようとしている。現在と違い機械工学科（当時は理工学部精密機械科と云う）卒業生13名、現在生存者12名と云う小世帯であった。

入学時は杉本町の校舎が米軍に接収され、教養部時代は北区南扇町の仮校舎（元済美第3尋常高等小学校と云う）を使用し、専門課程はやはり北区北扇町（元扇町商業学校）の仮校舎を使用しての授業であり、従ってキャンパスもなく運動場も狭く、よく近くの扇町公園迄スポーツをしに行ったものである。

卒業後数年前迄は毎年6月第1土曜日に同窓会を、又時にはゴルフの会を開催し、一同の親睦をはかっていたが勤務の関係でなかなか全員集まる事が出来ず、最近是小生の怠慢も重なって御無沙汰している次第です。その間1人の友（加来勝己君）が他界し、去り行く年を惜しむと共に年月の早さを痛感しています。

顧りみますと小生も卒業後3年目に父を亡くし、エンジニアとしての仕事と家業の両立をめざし9年余り頑張りましたが、現在はエンジニアとしては全く畑違いの家業（貸ビル等の経営）に専念しており、設備関係の維持管理に多少専門知識が生かされているという次第です。

運命というものは、たまたまある事情にぶつかると忽ちその人の道を変えてしまう。人間が運命を論じるには、先づ人間に生まれて来たことを幸運の第1とする必要がある。運命にはそれから逃れる事の出来ない先天的なもの、努力次第で幾らでも変えられる後天的なもの2つがある。世の中にはその事を忘れて如何に自分は不運だと歎いている事が多いことだろう。自分では短所と思っても僅かな改善努力によって長所に様変わりする事が少なくない。人間は万物の長として優れた知能と活動力を持っている。科学を発展させ、社会組織を改善し、法律を作って道徳を強化させ弱きものを保護し、万人が平等に栄えることを計らっているが、自然の制約を越えてまで活動圏を延ばそうとするのは、自然の摂理を知らぬ不遜の事と云わねばならない。若年期に迎えた父との別れにより将来の進路を180度転換せざるを得なかった事は、小生にとってこれも運命である。

最近ようやく事業の方も世界的な安定成長と共に落ち着き、余暇をみつけて月に2～3回近くのゴルフクラブに行き、峠を越えた体力の維持管理に心掛けています。次第です。

（機械・昭和30年卒 光栄産業(株)代表取締役）

無公害車

金田 幸雄



同窓会からの依頼で、投稿の機会を得ましたので、古い思い出話を臆面もなく書かせて頂いた次第です。

大阪市交通局に昭和30年4月、卒業と同時に就職し、早や26年も過ぎました。現在、出向で高槻市交通部に赴任しています。大阪市に入った当時、トロリーバスが都市交通機関としてクローズアップし、増強計画もあったところから、トロリーバスの技術部門を担当することになりました。トロリーバスの正式名称は無軌条電車です。路面電車に比べ建設費が安く、石油でなく国内資源の電力（当時は水力発電が主力）が利用できること、また排気ガスや騒音がなく、スピードもあり輸送力も従来のバスよりも大きいといった点が高く評価され、路面電車の補助機関として登場したのです。しかし、やがて経済の高度成長時代に入ると、道路交通事情が悪化し、路面電車と同様に運行効率の低下と、普通バスに比べて車両購入費や維持費が高つくなどの理由から廃止へとすゝみ、昭和45年6月を以って17年間の歴史の幕を閉じたのであります。トロリーバスは大阪市のほか東京都、京都市、などの都市でも運行しましたが、同様に廃止になっております。しかし、黒部アルペンルートの黒部ダムと扇沢間6.1km（針ノ木トンネル）を関西電力KKが経営するトロリーバスが走っています。私自身まだ行ったことがないのですが是非機会を見つけて乗ってみたいと思っています。排気ガス対策と、長い坂路であるため電気回生制動が利用できるなどトロリーバスは打ってつけです。このトロリーバスが開業するにあたり、昭和39年に大阪市交通局で、担当者の研修をしたことがあります。

それは、一つは米国G.E社方式（東芝製）の制御装置を同じく採用したことと、もう一つは「無軌条電車」の運転免許が必要なことから研修したわけです。

その後トロリーバスが廃止されて2年後の昭和47年4月に電気バス2両が運行しました。現在、市内此花区の春日出庫で営業しています。電気バスについて後発であった神戸市では一定の試験データが得られたとして廃車しました。東京都でも同じく廃車の方向です。京都市では阪急桂駅から洛西ニュータウン間を6両の電気バスが2年前から運行しています。電気バスは走行用のバッテリーが重く、高価なため、維持費が普通のバスの2～3倍かかることから伸び悩みですが、一日も早く高性能のバッテリーの開発が望まれるところです。

高槻市ではバスの乗客が年々減少しており、財政事情が悪く再建計画を実施しています。

バス離れは各都市共通の悩みですが、高槻市の場合、自転車への転向が顕著です。無公害バスの発展を願っている私自身ですが、省エネ、無公害車である自転車に悩まされるのはまことに皮肉なことだと思っています。

（電気、昭和30年卒、大阪市交通局主幹）

昭和1 桁生れの近況

岩井武彦



理工学部を卒業して早や26年、工学部に席を置きながら工学部同窓会には殆んど縁がなく、毎年、時には恩師を交えて催される化学関係の同期会で旧交を暖めています。これも大学に残られた同期の西本先生の大変な努力の結果と

感謝いたしております。

思えば故長浦茂男先生にご指導をうけ、卒業と同時に180°転回して医薬品企業に入社し、薬学、医学関係の勉強におわれながら現在医薬品の品質管理を担当しています。入社当時と比べ最近ではGMP (Good Manufacturing Practice) が実施され、製造から使用までの一貫した医薬品の安全性確保のため、後輩社員を叱咤し口うるさい中年先輩と思われていないかと気になる年令になりました。

医薬品は、国民の保健衛生のために使用されると云う重要な使命を持っており、従来から薬事法により、その製造から販売にいたるまで種々の規制がなされていますが、近年急速な科学技術の進歩と消費者の医薬品に対する意識の向上によって、有効かつ安全性の高い優良な品質の医薬品の供給が社会的に要請されてきました。そのため原料の受入れから最終製品の包装、出荷にいたる製造工程全般にわたっての十分な組織的管理のもとで医薬品を製造できる体制の確立の必要性からGMPと云う厳しい制度が実施されました。

一方研究開発面において、わが国における製薬企業も独自の新薬開発に力を入れ、最近では米、西独に次いで数の上で世界第3位にランクされるようになった。しかし研究開発力は数だけで評価しうるものではなく、国際的にも通用する新薬でなければならないと思います。

このように有用な新薬の開発は、いかに早く情報を入力するかが問題であり、一説によれば研究者の情報源は約40%が雑誌論文、約30%が学会や個人的接触などによると云われ、耳からの情報もまた重要であることが示されています。研究者は学術誌を中心に自己の研究成果を公表すると云う点から情報提供者であるが、それと同時にこれらの活動を通じて最新情報のよき入手者でなければ

ならず、今後益々新薬開発の困難に伴ない企業における研究者にはこのような資質が益々要求されることになるのではないかと思います。

(応化・昭和30年卒・扶桑薬品工業K.K. 品質管理課長)

縦糸と横糸と

川越 浩



私達の仕事の一つに技術相談業務がある。ここでは、研究業務のように特定の専門領域に限らず、生産現場から持込まれるさまざまな問題に解を与え、企業に実利をもたらすことが要求される。

私の属する油空圧部門は、それ自体総合技術的な側面を強く持ち、特にこの技術を中小企業の生産設備にF A (フレキシブルオートメーション)の具現手段として導入するとき、多くの分野の技術がかかりを持っていることがわかる。そこでいつも脳裏にうかぶのは学生時代に教わった「機械工学とは三力学を縦糸とし、他の科目を横糸とする織物のようなものである」という言葉である。油空圧装置の強度計算に材料力学、作動流体の流れ解析に流体力学、省エネルギー改善に熱力学を縦糸として、油空圧機器の精密加工に機械工作、仕上りチェックに測定工学、耐久性、信頼性に潤滑工学、動きの自動化に制御工学、弁や回路の振動に機械力学、油の冷却に伝熱工学等諸々の科目が横糸として役に立ち、据付け場所に最もフィットした緞帳にデザインできるのである。

何か装置を計画し、最終的に物を作るという立場からみれば、他の専門家の手を離れても、最後までつき合わされるのが経理屋と機械屋である。製品を作るということに対してトータルな物の見方ができるのも機械屋に要求される大切な資質ではないかと思う。日頃の仕事と少し違う分野にタッチしなければならぬとき、講義で聞いた分野であれば、新しい資料をさがすにしても極めてなじみやすいように思われる。学生諸君も、専攻は勿論深く極める必要があるが、将来出会うであろう課題に備えて、糸口というかフックのようなものを出来るだけ多く仕込まれる事をお勧めする。

もう一つ、私達サラリーマンと違い「己の才覚で従業員とその家族のメシ代を稼ぎ出す中小企業のオヤジは、どこか秀れたところがあるはずだ」という前提の下、謙虚な気持ちで人に接していると学ぶところが大変多いことに気がついた。今頃このようなことを言っておくけど失笑をかうかも知れないが、生きた社会で、人間を教材に学ぶこと自体が極めて興味深いことでもあり、幾重も

の織物をつなぎ合わせる太い横糸として大切なものではないだろうか。

(機械・昭和35年卒 大阪府立工業技術研究所)

私の近況

石田 喬重



昨年は同窓会の評議員会ということで、数年振りに学校を訪れさせてもらいました。自宅も大阪の南ということで、たまに乗る阪和線の車窓より木立ちの中に見えかくれる白い杉本校舎の建物を望むとき、懐しさと歳月の早さを感じさせます。

私共が卒業した時代は高度成長時代といわれる時期で研究開発を次々と必要とし、企業も多角経営の波によって研究者も技術者も不足してました。自分も今の会社の新設の研究所で数年過しましたが、研究投資も活発で技術者としては大変恵まれた時代でした。

ところが昭和50年代に入ると一転して産業界は低成長時代に入り、技術開発も効率の良い将来性のあるものに限定されてきました。単品での新技術、新製品の開発が頭打ちとなり、既存の技術を組合せたり、機械と電気、化学と機械といった異なる技術分野が融合し、新しい分野をひらいていく試みが盛んとなりました。

私が現在所属している環境装置の事業部門でも、製品の多様化とシステム化が進み、当初は公害防止、環境設備といえば、化学又は化工機の分野が中心でした。

今は有害物質を回収するだけでなく、有価物質として回収し他の工業材料として使ったり、省エネルギーの技術、電力や熱としてのエネルギー回収等が必要とされ、電算機を中心とする自動制御、情報管理、危険作業の無人化等、広い分野の技術を必要とするようになりました。

これからは単に知識や技術の組合せより一歩進んで、新しい技術分野を作り出し挑戦していく技術者が期待されています。私共の会社にも機械や化学出身のエレクトロニクス屋とか、また逆のケース等の人々が多くいます。この様な人々は将来リーダーとなっていく場合が多くその経歴をみますと、生産技術・製造・製品設計を経験し、それ等を新しいアイデアの糧として、技術者としての業績を挙げています。

工学部というと学科に別れている関係で、専門以外の科目については軽く考え、教養の続きぐらいに考えがちですが、これからの多様化されていく時代には基礎的なものを重視し、しっかりと身につけていく事が技術者にとって必要な事と考えます。

(電気・昭和35年卒・久保田鉄工(株) 設計課長)

構造屋

小島 弘



昭和35年春、なんとかかんとか卒業してより、かれこれ21年半の間構造屋として現在に至っています。

当初、専門課程の3～4回生では、上田先生の下で計画—ミュージアムの洋書解読—を実習しており

まして構造の勉強はあまりしなかったのです。計画より苦手な構造担当者—構造屋—に方向転換したのは、4回生の夏休みに、神戸市内にあるS建築設計事務所に実習に行き、鉄骨の構造図と、それに伴う部材チェックを手伝い、卒業後もそのまゝ、S建築設計事務所就職した時、実習の経験から手不足の構造担当者の下で業務を担当し、その人から教えられたのがスタートで、昭和35年です。

それ以来、21年余り学校のテキスト、学会の各種構造規準、友人等を手本として時には全くその通りの手順で、暗中模索を繰り返しながら構造屋として育ってまいりました。

最初に云われた事は、元来日本の建物は（神社仏閣にしろ城にしても）骨組即ち構造美がそのまゝ、意匠美として現在でも残っているように、誰でも分り易い力の流れに沿った構造が、意匠上も機能的にもすばらしい構造美を形作っていると云う事でした。

世に沢山の建築物がありますが、骨組と意匠の調和がとれた建物が最後には残っていきます。骨組—構造—をなおざりにしたものは寿命の短い建物となります。

構造屋は、人命なり大切な機器の保護を又建物の生命もなっていますので、責任が重い事はどなたも認める処です。「構造屋」でも、単なる計算をし図面を書くだけの「計算屋」でなく建物の用途、本質を考え基本計画からとり組む「構造屋」になるべきだと思います。

私は、少しでもその方向に近づきたいと思ひますし、「構造屋」として誇りを持つべきだと常日頃考えております。（建築、昭和35年卒、(株)三栄設計設計室長）

ザイルでの吊橋建設

中山 武志



ザイル共和国（旧ベルギー領コンゴ）にはアマゾン河に次ぐ世界第2の水量のザイル河が流れており、現在この河口より150km上流にて全長720mの道路、鉄道併用の吊橋と8kmの取付道路の建設が350億円の日本の借款により行なわ

れています。私はこの工事の着工（昭和54年5月）より2年間ザイル政府の職員（ザイル運輸省マタジイ工事事務所長）となってこの工事の監督をし、このたび（昭和56年5月）帰国してきました。

ザイルは面積が日本の6.5倍、人口約2000万人のサハラ以南の大国の一つで、銅、ウラン等の鉱物資源の豊庫だが、海岸線が35kmしかなく、上記主要産物はアフリカ大陸の中央部に産するためそこから海岸までの搬出が問題となっている。現在は地形などの関係より鉄道・河川、鉄道、河川の併用となって積み替えロスが多いためこれを一貫した輸送ルートに整備する必要がある、そのため新たに鉄道とザイル河を渡る橋梁が必要となっている。当初は日本の借款にて鉄道も施工する予定であったが、インフレ等により資金不足となったため当面橋梁とその取付道路の施工となった。計画の初期には鉄道計画が主体のため日本の国鉄からザイル政府に技術者が派遣されていたが途中から吊橋に変ったため本州四国連絡橋公団より私が派遣されることとなった。

私にアフリカ行きの声がかかった時、ザイルという国名も知らず、暗黒大陸のイメージしかなく、不安にかられていろいろ調べてみると、政情不安で治安が悪く、医療、子供の教育、通信手段などの条件が劣悪で、その上、公用語が今迄に習ったこともないフランス語と聞いて正直なところかなりちゅうちょした。しかしここで死んでも地球上変りわないと思ひ行ってみると、生活上の不便さは国内で調べていた通りであるが、不思議なものでそれを感じるのは半年ぐらいの間で、そのうち住めば都となって、逆に日本では感じられた関東大地震や原爆戦争の不安がないだけかえって気が楽と云った気分になりました。そして工事の方も日本のような公害や補償問題がなく2年間で日本の数年分が出来上り、40才を過ぎてからのフランス語も十年以上苦労した英語よりもはるかに上手に使えるようになりました。無事帰ってきた今、またどこかザイルのような発展途上国にて仕事があれば飛んでいきたいような気持の今日のごろです。

（土木、昭和36年卒、本州四国連絡橋公団工務二課長）

同窓の縦のつながり

和倉 慎治



我々のクラス会は近年毎年のように実施され、懐かしい思い出と接する機会が得られて、うれしく思っています。昭和55年末には藤井先生にも御臨席願ひ、本当に楽しいひと時を過せました。卒業後立派な同窓会館が建てられ、会報も発行されるよ

うになり、卒業式もなかった我々にとっては特に有難く感じられます。クラス会のように横のつながりも気がおけなくてよいのですが、せっかく会館も会報もできたことで、縦の繋がりも持てるようになればきっとすばらしい同窓会になるでしょう。将来は縦の繋がりへの企画を進めていただけることを願って、私が最近同窓の縦の繋がりから得た恩恵を記します。私が所属します(株)大阪青年会議所(大阪J C)は、国際都市＝大阪をめざしさまざまな調査研究・又はシンポジウムを行ってきました。今年「民間レベルによる国際経済交流の原点は移民にある」との考えから「移民史の研究」をテーマにブラジルのサンパウロを訪れました。今年は大阪J CとサンパウロJ Cが姉妹関係を結んで10周年に当り、その親善訪問も兼ねておりました。大阪市とサンパウロ市、大阪市大とサンパウロ大も姉妹関係にあり、特に市大では応用物理の大倉教授が、サンパウロ大で教壇に立っておられたり、また数年前に兼松教授と八木研究員(S 42年応物卒)がサンパウロ大に訪れられたことを思い出し、サンパウロ大とのコンタクトを依頼し、大倉教授から現在サンパウロ大に教授として在留している松岡政雄氏(S 47年応物卒)をご紹介いただいた。松岡氏を通じてサンパウロ大のSaito教授の「移民史の講演、Suzuki教授、Watanabe教授等8名の教授連との「トークイン・サンパウロ大学」を予約でき、その結果我々大阪J C 7名の団員が満足できるすばらしい成果を得ました。地球の真下にあるブラジルで初対面(?)の松岡氏とも同窓ゆえすぐ意気投合し、市大のこと、日本のこと等を話したり、トークインの場では教授連から兼松教授、大倉教授、八木氏を懐かしむ声も聞かれました。このように今回、先生、先輩、後輩の方々の縦の繋がりを有効的に活用させていただき、同窓の有難味を身をもって体験できたことを感謝しています。(応物、昭和45年卒、アサヒ軽金属工業(株)商品開発部長)

近況雑筆

小森 優



本来ならば「卒業して早や6年」とでも書き出すべき処ですが、この6年が可成長い年月に思える此の頃です。

昭和50年の卒業後、修士、博士課程へと進ませて頂いたのですが、諸々の事情で市大を出て京都大学医学部付属病院に入り情報処理関係の仕事に就く事となり、6年余りの市大生活に終止符を打ちました。それまでの時代が懐しき良き時代と思えるには未だ若過ぎる様です。ただ怠惰に過した日々が悔まれる毎日であります。

病院に入ると、動き出して一年目というデータベースシステムを受け持たされました。コンピュータは計算センターに何度か通っていた程度の知識の上、病院には工学屋が居らず、メーカから派遣されたプログラマーが一人という、研究室時代では考えられない様な巨額を費した設備としては心細いスタートでありました。見様見真似でアプリケーションプログラム(当時は事務関係が中心)を書いたり、システム設計の真似事から電気工事までやり種々の雑用に忙殺されていましたが、反面自分にとって新しい技術に触れてゆく事が愉しくもありました。

その後、雑用に終始する毎日に厭気がさす事も度々でありましたが、検査データ処理など本来病院へ入る動機でもあったME(医用電子工学)に近い事も加わり、最近では画像処理を中心とした研究を兼務しています。

少し落ち着いてみて見回してみると、病院という所は各種の新しい技術、それもトップクラスのものが絶えず導入され、技術的に非常に刺激が多く、データも豊富で、研究対象としての興味は尽きない。しかも医療・臨床といった技術成果の社会へのフィードバックの近道が何時も傍にあるという一種の閉じた小技術社会を形成している。雑用・薄給という二大悪条件は別として、技術者としては面白い仕事場かと思えます。

好調な求人状況が伝えられる昨今ではありますが、これから卒業される方々も一流企業に限らず新しい道を探られるのも一興かと思えます。

末筆ではありますが、去る昭和55年11月22日我々の同期生であり、2年先輩(紛争当時休学)である岡部孝義君の逝去を記しておきます。多感で非凡な才能の持ち主であった彼の死を惜しむものであります。

(応物、昭和50年卒、京大付属病院中央情報処理部)

学部頃の思い出

串阪 徹



学部を卒業して1年半が過ぎました。私が2回生のときは後期試験が度々流れ、4月に全員仮進級で3回生になりました。またその7月の試験の時には、いつもの調子で教養へ行ってみると試験が実施され、真面目に勉強していた者はともかく、すべてレポートという希望的観測者の多数は、青ざめて帰ったものでした。そして進級したかも分らぬままに、3回生の後期試験という風に無茶苦茶な状態でした。それ以後試験が流れたという噂は耳にしませんから、一番悪い時期に出くわした事になります。

4回生になり竹屋研の鈴木先生の下で電離層観測を行ないました。5月には、南先生のお伴をして、東大宇宙研の計算機を使って、ロケットデータを解析しましたが、少ない時間とフオートランを使い始めて数ヶ月という事もあって満足な結果が得られず、以後市大計算センターで続けました。これに引き続いて院生の中西君の実験で4回生が2名ずつ東大へ出向きましたが、夏休みに2ヶ月近く滞在した者もいました。そして秋からは、プラズマ銃製作の為にチタン板に水素を化合させるという一大プロジェクトが始まりました。なにしろ600度の水素中での反応を扱うので、予備実験を重ね、本実験は1月31日となりました。大和川の河原に実験装置を運び、発電機やビデオカメラまで持ち込んで実験をしたのですが、気温零度の河原では風が吹き荒れ、私は1日目にしてダウンしてしまいました。以後2・3日続けられた実験も、水素と同時に導入したアルゴンや、思う様に上がらぬ温度の為にチタン板表面を変化させただけで終わってしまいました。理学の知識を必要とするこの実験は我々には無理があったようです。

辛くて苦しい日々もありましたが変化に富んだ学部生活を送れて有意義だったと思返しています。

(電気、昭和55年卒、大学院・電気工学専攻)

残像としての建築

永島 敏郎



私が大学に通い始めてもう6度目の秋になります。その間、技術は絶えずより高度で緻密な方向へと突き進みつつあります。そのような状況の中で、大学を巣立つ日も近づき、少し大学のキャンパスを振り返ってみようと思います。

6年も居りますと、市大の雰囲気も随分変わった、という印象が強いものです。

入学した頃は、それほど車の数も目立たなかったのですが、最近では、大学が車で埋められるかのような状況です。学生の容姿もある意味で、やばったさを脱しようとしているように思います。また、学舎の増築も進み、整然とした樹木の成長とともに、市大も整いつつあるような印象を受けます。

しかし、反面、市大のキャンパスは一向に、印象深さが感じられないように思います。確かに、キャンパスを見渡せば、少しづつ新しい学舎が加えられ、時とともに樹木も育って、整いつつあるようですが、大学で建築を学んだ者としては、些か、物足らなさを感じる建築群なのです。教養の学舎や本館などは、できた当時最新のデザインであったようですが、我々にその歴史を語ってくれる程、良く維持されているように思えません。また、新しくできる学舎も、少しも新鮮さが感じられません。とにかく、我々の心に焼き付く、印象的な建築や空間が、市大には存在しないのでは、と思えてきます。

市大は、百年の歴史を誇っていますが、大阪市立大学になってからは、まだ半世紀にも及んでいません。それゆえ、現在、市大というイメージを具現する空間及び建築を、記憶の中に表象できないのかもしれない。

変化の激しい社会状況ですが、市大を巣立っていく学生に、風景としての残像をとどめる建築や空間が、今後刻まれていく歴史の中で創造されることを願望する次第です。(建築、昭和55年卒、大学院・建築学専攻)

技術者とは

川口 和也



技術者とはいったいどういう人達でしょうか。世間一般に思われている事としては、① 理科である⇔数学に強い⇔頭が良い。これはどうでしょうか。理科であれば数学に強い？これは当ていそうだが、私のような例外もあるし、経済の人だって社会現象に数学を使っているからこちらの方が数学に強いかもしれません。数学のできる人は頭がよいか？小学校以来の教育のため、そう思われているようですが、友人で数学のできる人が自動車免許の筆記試験に三度落ちたのを知っています。② 技術者集団をつくっている⇔世間の動向に無関心⇔意固地。これが本当だとすると私は技術者になりたいなんて、ちょっと人前では言えなくなります。世間の人々の目には、技術者集団とは特異な集団として映っているようです。これ

第2回評議員会の報告

第2回評議員会は昭和56年2月7日に田中記念館で開催されました。主な決定事項は以下の通りです。

(1) 収支決算 ('79.6.1~'80.12.末) (単位円)

収入の部		支出の部	
繰越金	9,846,600	第1回評議員会	148,000
終身会費	4,812,000	第4号名簿	5,108,800
臨時協力金	3,627,000	第1号同窓会報	1,031,800
第4号名簿	2,861,800	臨時措置費	135,800
全上賛助金	1,075,900	事務局経費	506,400
預金利息	967,700	還付金	57,000
		100周年記念協力金	10,000
		次期繰越金	16,193,200
合計	23,191,000	合計	23,191,000

(2) 役員改選 (P.15参照)

今回、長期間当会のために、会長、副会長、監事としてご協力下さった並河俊次、大橋弘之、西田新のお三方がそれぞれ、井田憲治、高田満、保坂博通の三氏に代り、学内理事であった美馬宏司、草開稔の両氏もそれぞれ、北田忠義、岡本次郎の両氏に代りました。

(3) 事業計画

- (i) 会報第2、3号を昭和56、57年12月上旬に配布。
- (ii) パート・タイム事務局員の採用日数を増加。
- (iii) 会報第1号で要望の臨時協力金・旧会費により特別基金を設定。その利息を当会運営上必要が生じた場合に評議員会の承認を得て活用すること。

(4) 昭和56・57年度予算 (単位万円)

収入の部			支出の部		
年度	56	57	年度	56	57
前年繰越金	1,619	624	特別基金	1,200	—
終身会費	310	300	第2回評議員会	17	—
預金利息	40	40	同窓会報	130	150
名簿 vol. 4	15	—	事務局費	83	85
臨時協力金	70	—	繰越金	624	729
合計	2,054	964	合計	2,054	964

は技術者の行なっている事が、一般の人々には情報不足で解らないからではないかと思えます。人類の明日を物質的な面で実現しようとする技術者が一般の人々から分離すれば恐い事になりかねません。技術者は世間の事に精通し、柔軟な頭を持っている事が必要だと思えます。

大学の教育は、専門知識を詰め込むのではなく、先ず教養人を造り、その上に科学的思考の身についた人間を造る事にあると思えます。大学に入学し最初の目標であった「技術を身につける」とは「科学的思考を身につける」と等価であり、私など、まだほんの駆け出しで何が技術やら解りませんが、毎日の勉学を通じて論理的な思考や科学の目を持って問題に対処するようになってきているようです。この事は技術者にとって最も大切な事と思うのです。

しかし、この小文を書くにあたって四苦八苦し、汗をたらたら流しながら書いている次第で、一般の教養人と言えるかどうか。頭が偏ってきている自分を戒め、もっと文科の事を勉強しなければと思うのです。何か論旨がまとまりませんが、このへんで筆をおきます。

(土木、昭和55年卒、大学院・土工学専攻)

事務局年報

('80・11・1~'81・10・末)

'80年11月…市大百周年記念祝典・祝賀会に(15日:ホテル・プラザ)に会長・理事・評議員約50名が出席。

'81年2月…第2回評議員会・懇親会(7日:田中記念館)を開催。特別基金(定期預金)を設定。

'81年3月…学部・大学院合格者に会則・案内状を配布。学部送別式・卒業祝賀会(24日)に会長・副会長他出席。

'81年4月…第一回目の新理事会を開催。

'81年6月…三瀬工学部長、工学部創立40周年記念('83年3月)行事の検討を当会に要望。

'81年8月…会報第2号の編集委員会発足、作業開始。

'81年9月…三瀬工学部長、竹屋・兼松両教授等と会長他理事5名が工作センター建築の件で懇談。

'81年10月…第2回会報編集委員会(16日)。第2回理事会(17日)にて第2号会報案・センター建築の件討議。

役員名簿 (任期昭和57年12月末)

会長 井田 憲治 (土木30) 副会長 高田 満 (電気22)
 理事 東田 和郎 (機械20) 塩山 正治 (電気23) 坂内 幾男 (建築24) 中島 弘 (電気25)
 大橋 岩男 (土木25) 井口 悌三 (応化28) 人見 宗男 (機械31) 大橋 邦夫 (応化32)
 多胡 進 (建築34) 中井 博 (土木34) 北田 忠義 (応物36) 西村 昂 (土木36)
 田守 芳勝 (応物38) 岡本 次郎 (電修39) 南斎 征夫 (機械39) 玉垣 誠三 (応化39)
 石黒 英治 (応物40) 東 恒雄 (機械41) 倉田 克彦 (土木42) 赤埼 弘平 (建築45)
 南 繁行 (電気45) 大嶋 寛 (応化49) 茶谷 修治 (応物50)
 監事 保坂 博通 (応物34)
 評議員

卒業	機 械	電 気	応 化	建 築	土 木	応 物
20	宝力良幸	安藤慶一	—	高野晃嗣	能城正治	—
22	藏田廣造	—	—	村井健三	別所武雄	—
23	嶋田定	—	—	西川幸之輔	岡正一	—
24	—	金田弥吉	—	—	植木正富	—
25	葉田喜一郎	安藤周二	—	大東清四	生島一成	—
26	—	太田鉄造	—	小河一真佐	名越孝	—
28	中川晴夫	橋本賢一	岡本由之	福田充宏	—	—
29	日枝仁郎	立石浩二	田岡二郎	—	田井戸米好	—
30	杉浦重光	金田幸雄	岩井武彦	田口泰三	豊田敏	—
31	秋山高治	壺井芳昭	小林辰一	安藤昌範	嶋経夫	—
32	岩井宣雄	加藤隆三	木下雅悦	長町守康	吉村憬	上野逸
33	小西峻二	細川省一	福村吉晃	内藤徹男	高田宏直	薩摩新
34	久門輝正	小西陽雄	上原敏男	木村久夫	山崎真喜雄	西田克
35	川越浩	石田喬重	們章	小島弘	上田伸三	粟根宏
36	小川次夫	塩飽弘久	中出伸一	溝神宏至朗	園田恵一郎	村上仁
37	尾崎俊夫	高下照久	近藤紘一	八木勝	西垣好彦	西村宏
38	河内秀二	森下昂	浅岡力夫	有光友興	小田直俊	嶋谷義
39	土井紀宏	当麻円雄	渡辺隆夫	木本英爾	高山直	室野逸
40	小川健一	倉田一之	五百井正樹	浅野誠	山田優	片山賢
41	溝口進	森井征二	山口英昌	貴志義昭	湊勝比古	奥田邦
42	村田一夫	片岡二郎	三浦洋三	坂倉義雄	望月秋利	八木内
43	木村義弘	坪香英一	伊木義高	荒木良	北田昇八	堀代信
44	松下義治	山本正樹	谷本高	大倉良	角野昇八	萬代信
45	七條徳成	梅本伸作	鈴木木	久保田弘昭	小林治	和倉永
46	上道俊和	森下勉	山田悟	大西康雄	伊藤修章	岩永井
47	岡本利一	赤木利行	吉田育	三宅良一	山本修全	藤田中
48	辻本良秀	河合寿夫	西林正隆	井上清司	岸田全	田井義
49	三木健一	広瀬義晃	西田隆仁	国田幸雄	谷俊寛	岩井健
50	中野康夫	金沢勝己	門脇敏夫	北野博己	黒山泰弘	小平森
51	坪倉由明	前谷治男	米田正博	岡崎道晴	長谷川良一	平松敏
52	山中朗	浜田明	大屋尚洋	中佐一重	松本彰彦	南口栄
53	伊崎修	三上明	義親木	田中康高	伊勢三郎	太田豊
54	芦田史	松下行	雄中川	伊勢博幸	富岡健一	末国克
55	大山寛	串坂徹	加柴莊	永島敏郎	川口和	多良勝
56	松吉徹也	向井博臣	梅田尚	小西浩	安藤亨	真鍋幸一郎

終身会費を払込んで下さい!!

当会の運営資金は、主として正・準会員各位がお払込み下さった終身会費（現在2万円）でまかなっています。種々ご都合もあることと思いますが、現在まだ未納の方は早急にお払込み下さるようお願い致します。

会費のご送金は下記のいずれかの方法をご利用下さい。

- (1) 郵便振替（口座番号・大阪3-12741、加入者名：大阪市立大学工学部同窓会）
- (2) 郵便現金書留
- (3) 住友銀行南田辺支店
（この場合は別にご連絡下さい）

ただし、昭和54年3月までにご卒業の正会員の方には、昭和55年12月15日を期日とする臨時措置を取りましたのでお払込みの前に払込み額を当会事務局へお問い合わせ下さるようお願い致します。

＝ご住所・お勤め先の変更連絡のお願い＝

当会では、昭和54年以降、毎年、会報または会員名簿のいずれかを配布することになっております。しかし、ご住所やご勤務先の変更をご連絡いただけていない場合は、会報や名簿がお手許に届かなかつたり、各位の現住所や勤務先の正しい情報が同級生などに伝達できなかつたりすることになります。

事務局としては、このような事の起らないようにしたいと努力しておりますので、変更のあったときには、できるだけ早くご一報下さるようお願い致します。

百周年記念募金について

	件数	申込(千円)	振込(千円)	'81年10月20日現在の募金状況は表の通りです。
法人	284	710,480	630,680	当会々員のご協力は619名で850万円に達しました。ご協力有難うございました。
個人	6,556	134,194	133,871	
計	6,840	844,674	764,551	

大阪市内立大学後援会(内線3840)

—変更通知—

大阪市立大学杉本町学舎の町名と番地が下記~~~~のように変わりましたので、当会への通信もこれにならして下さい。

〒558

大阪市住吉区杉本3丁目3-138

大阪市立大学工学部内
大阪市立大学工学部同窓会

編集後記

早本年も師走。さぞ皆様も「光陰矢の如し」と、まともや実感なさっている頃ではと拝察いたしますが、如何がお過しですか。約一ヶ月前半、史上3番と云われる北炭の悲惨な事故と重複してマスコミを興奮させた、福井謙一京大教授のノーベル化学賞の受賞は、化学関係の仕事に励んでいらっしゃる会員諸兄に如何なる影響を及ぼすのでしょうか。

さて、ここに同窓会報第2号をお届けいたします。昨年の創刊号は、百周年記念行事をお知らせする必要から今回よりも2ヶ月程早く配布いたしました。今後はこの第2号の時期に発行する予定です。この同窓会報は、創刊号にも述べられておりましたように、会員相互の交流・親睦と、会員各位と母校との繋がりを促進する一媒体として、皆様に活用される刊行物に育てることを目指しております。今や当会の正会員も約6000名に達しており、いろんな建設的ご意見・ご批判や、ユニークな寄稿素題をお持ちの方が多数いらっしゃると思いますので、今後は是非一筆ご投稿下さるようお願いする次第です。

ご覧の通り、本号の編集は創刊号の方針をほぼ踏襲しましたが、各学科主任の近況報告の代りに、特別会員通信としてご寄稿をお願いしました。また会員通信の依頼は、昭和20年から5年毎の各年次に卒業された全評議員の方々を対象にし、予想を越えるご協力が得られました。末筆ながら、ご寄稿下さった皆様、本号のために貴重な時間をお割きいただき有難うございました。

第2号会報編集委員

東 恒雄(機39)、南 繁行(電45)、玉垣誠三(化39)
赤埴弘平(建45)、倉田克彦(土42)、石黒英治(物40)
人見宗男(機31)